

令和6年度
東区地域福祉活動計画における地区別計画の評価報告

2025.7.29

【令和6年度 山の下地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画評価表<2021~2026>

グループワーク意見の集約			
<p>推進目標1:地域の問題解決のための会議を開催しよう</p>	<p>評価 A・B・C</p>	<p>推進目標2:顔の見える関係づくりをしよう</p>	<p>評価 A・B・C</p>
<p>・民生委員・児童委員と自治会・町内会長が定期的に連携会議を実施し、情報交換を継続。</p> <p>・ゴミ出しや買い物支援、友愛訪問など、具体的な住民支援活動が実行され、地域の福祉向上に寄与している。</p> <p>・除雪や庭木伐採など、小規模な日常課題に対する地域活動も進行中。</p> <p>○高齢者の孤立や情報不足への対応にさらなる工夫が必要。</p> <p>○支援活動を担う人材不足、特に若年層の関与不足が今後の課題。</p> <p>○行事の参加者が固定化しており、地域の一体感の向上が求められる。</p>	<p>B</p>	<p>・まちづくりセンターのフリースペースは、子どもの学習場所や住民の打ち合わせスペースとして効果的に利用されている。</p> <p>・「山の下夜遊びランド」や「ハロウィンパーティー」といったイベントが成功し、若い世代の地域活動への参加が増加。外部地域からも訪問者があり、継続的な実施予定。</p> <p>・一部地域では、世代間交流や子どもを含む地域行事の工夫・実施が進む。</p> <p>○若い世代や住民全般の関わり合いが不足しており、顔が見える関係づくりはまだ道半ば。</p> <p>○ゴミ捨て場や公民館など、特定の場所での交流はあるものの、日常的な顔の見える関係づくりが難しい地域も多い。</p> <p>○住民の高齢化や核家族化、転出入の多い住民構成が壁となり、繋がりの形成が困難。</p>	<p>A</p>
<p>推進目標3:災害時、要支援者への対応や協力体制の整備をしよう</p>	<p>評価 A・B・C</p>	<p>推進目標 4:</p>	<p>評価 A・B・C</p>
<p>・各町内で避難訓練を実施し、支援体制の工夫を図る。</p> <p>・要支援者名簿の整備と情報共有、避難所運営訓練を行い、実務的な対応の模索中。</p> <p>○名簿の活用や避難支援の具体策が不足。</p> <p>○津波ハザードマップの見直しや避難場所の拡充が必要。</p>	<p>C</p>		

取り組み状況から見える課題

1 住民同士の関係希薄化と世代間交流の困難さ

- 高齢化や核家族化により、日常的な交流が減少し、住民同士の顔が見える関係づくりが難しい。
- 地域イベントの参加者が固定化しており、新しい参加者の巻き込みが課題。特に若い世代の関与が不足している。

2 災害時の支援体制の不十分さ

- 要支援者名簿の具体的な運用方法が定まっておらず、避難時の実践的な支援体制が構築されていない。
- 津波避難や避難所の拡充が進まず、防災訓練の住民参加が固定化されている。

3 高齢者や要支援者の孤立への対応不足

- 高齢者や障がい者が孤立するリスクが高まっており、生活支援や情報共有が十分に行われていない。
- 特にゴミ出し支援や除雪支援など、日常的な支援活動を継続するための担い手が不足している。

4 地域の持続可能な活動基盤の確保

- 自治会費や活動費の確保が困難な中で、住民活動を維持・発展させるための資源確保が課題となっている。
- ボランティアや役員の負担が過重になり、新たなリーダー層の育成が求められている。

評価(取組んだことの効果や成果)

1 若い世代の地域活動への参加増加

- イベント(例:山の下夜遊びランド、ハロウィンパーティー)を通じて、若い世代の地域行事への参加が増加。特に子どもや若年層が地域交流の輪に加わることで、持続的な活動基盤が形成されつつある。

2 防災訓練や避難所運営訓練の実施による地域防災力の向上

- 避難所運営訓練や津波ハザードマップの情報共有を行い、防災意識が向上。具体的な避難行動を計画・実践することで、災害時の対応力が着実に強化されている。

3 顔の見える関係づくりに向けた取り組みの進展

- まちづくりセンターのフリースペース活用や座談会を通じて、住民同士の交流や意識共有が進み、日常的な繋がりを深める方向へ進んでいる。

4 高齢者や障がい者支援の継続的实施

- ゴミ出し支援や友愛訪問、除雪作業などを地域住民が主体的に行い、支援を必要とする住民を支える活動が定着している。これにより、高齢者等の生活負担が軽減され、地域全体での支え合いが促進されている。

5 地域会議の開催による情報共有と支援体制の向上

- 民生委員と自治・町内会長による連携会議や懇談会の定期実施を通じて、課題の発見と解決策の議論が進行中。役員間の情報共有が密になり、支援活動がより効果的になっている。

次年度に向けて

・要支援者への平時のつながりから災害時の対応を各自治・町内会長ごとに推進していく。生活支援(ゴミ出し等)や災害時の避難体制の共有を要支援者本人や、関係者、周囲の住民間で実施していく。

・若い世代を地域活動にとりこむために、イベントの開催等を通して基盤づくりを継続していく。

【令和6年度 桃山地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画評価表<2021~2026>

グループワーク意見の集約			
推進目標1:問題をみんなで共有し、地域で顔が見える関係づくりをしよう	評価 A・B・C	推進目標2:次世代の担い手を育てよう	評価 A・B・C
<p>・桃山プロジェクトを通じて、地域には生活に困難を抱える住民がいることが明らかとなったが、「助けて」の声の拾い方が難しく、住民状況の把握にも差がある。民生委員は守秘義務があり情報提供できない。まずは情報の得られる町内から支援を始めることが有効と考えられる。</p> <p>・住宅修繕等の相談にも地域で対応することがあるが、対応に困ることもある。</p> <p>・高齢者を見守る仕組みが自治会単位でもであると良い。</p> <p>・行事運営や役員不足に悩む町内も多く、連携や負担軽減の工夫が必要。</p> <p>・子どもが減少している。子どもに限らず、多世代で楽しめる行事や防災訓練の合同実施等、誰もが参加しやすいやり方や環境整備が求められている。</p>	B	<p>・多世代交流イベントを通じて地域意識の醸成を図るとともに、若者が参加しやすい役割設定や、夜間・週末の会議開催、班会議に補助など若年層の参加促進を進めている。親子で楽しめる企画も取り入れ、自然なつながりづくりに努めているが、中高生や子育て世帯の継続参加には課題がある。</p> <p>・引きこもりがちな若者への対応には、精神的負担や支援体制の限界があり、専門的支援も必要とされる。</p> <p>・高齢男性が参加しやすい場づくりや、運営上の役割を担ってもらうことによる参加促進も重要な視点である。</p>	A
推進目標3:地域で見守り・助け合いができる環境づくりをしよう	評価 A・B・C	推進目標4:町内の人たちが気軽に集う場所をつくろう	評価 A・B・C
<p>・自治会集会所を茶の間等で有効活用をしてほしいが、なかなか進まない。</p> <p>・民生委員やあゆみ会、自治会による見守り活動や移動支援も行われているが、移動支援は利用ニーズが少なく交通の便改善に向けた勉強会を実施予定。</p> <p>・ふれあい給食会はコロナ後に配食へ変更され、再開には不安がある。仕出し弁当併用等工夫もあり。</p> <p>・「助け合い・支え合いの会」などの活動は継続しているが、人手不足が課題。</p> <p>・除雪活動では中高生の参加が難しい。コミ協で除雪機購入を検討中。複</p>	A	<p>・集まれる場所が整えば地域活動の幅が広がる。空き施設等の活用検討、補助金の継続性が課題となっている。身近な拠点をつくりたい。</p> <p>・ラジオ体操など親子参加型の活動はつながりの場となっている。</p> <p>・イベントに参加したい人はいる。一部の役員に負担が偏らない運営が必要。</p> <p>・横のつながりの希薄さ等から男性が地域活動に参加しづらく、参加を促すには「自分が必要とされる仕組み」が鍵。</p> <p>・町内集会所の活用が少ない。食事会やお茶会の開催が効果的ではないか。一方で、夏休みに集会所の開放をし</p>	B

<p>数で共同購入した自治会もあり。 ・要支援者名簿はあるものの実際の支援には限界があり、隣近所の協力促進にも課題が残っている。</p>		<p>て、参加者が多い地区もある。</p>	
--	--	-----------------------	--

取り組み状況から見える課題

【1】住民の支援ニーズの把握と対応体制

「助けて」と声をあげにくい住民へのアプローチが難しく、生活困窮や支援が必要な人を見つけにくい。情報共有不足により、地域内での支援体制が整いにくい。

住宅修繕など具体的な相談があっても、地域での対応・連携が困難なケースがある。

【2】町内会活動の担い手不足

一部町内会では役員不足が深刻で、行事の継続や運営に支障が出ている。

少人数でも負担を減らしながら活動を継続できる体制づくりが求められている。

【3】多世代・若年層の参加促進

中高生や若者、子育て世帯の参加が少なく、継続的な関わりが難しい。

プライドや孤立感から参加をためらう人も多く、「参加したくなる仕掛け」や役割づくりが必要。

茶の間や地域行事などへの男性の参加も進まず、参加しやすい場づくりが課題。

【4】地域資源の活用と継続的な場づくり

空き家や集会所などの地域資源を活用しながら、定期的な場の開放や、誰でも気軽に立ち寄れる場が必要。

評価(取組んだことの効果や成果)

【1】住民同士のつながりを深める取り組みが進んだ

防災訓練や祭り、ラジオ体操、ふれあい給食会などの交流行事を通じて、顔の見える関係づくりが着実に進んでいる。特に親子参加型の活動や世代を超えた行事が、多世代の自然な関わりを生む場になっている。

【2】地域課題の「見える化」が進んだ

桃山孤立ゼロプロジェクトを通じて、生活困窮者や支援が必要な住民の実態把握が進み、地域が抱える課題が明確になった。支援の必要性や住民の声を共有する機運が高まった。

【3】町内会・自治会間の連携が進んだ

町内会イベントの合同開催や協力体制の構築が進んだ地区もあり、活動継続につながっている。

一部地域(浜谷町・空港西など)では除雪機の共同購入など単一自治会の課題を複数自治会で連携して取り組み、具体的な連携の成果も見られた。

【4】地域資源の活用に向けた取り組みが始まった

集会所の開放など、地域内資源の有効活用に向けた動きが具体化している地区がある。

次年度に向けて

次年度は、地域活動の担い手不足や若年層の参加の少なさといった課題を踏まえ、イベントをきっかけとした若い世代の参加促進を重点的に進めていきます。

地域のイベントは、世代を超えて人と人がつながる貴重な機会であり、特に若い世代にとっては、地域との「最初の接点」となる重要な入り口です。まずは親子で楽しめる行事や、防災訓

練などの体験型イベントを通じて、参加のハードルを下げ、自然なかたちで地域と関わる場を用意していきます。

単に「来てもらう」だけでなく、自分の役割を持てる“参加型”の仕掛けを大切にします。たとえばイベントの企画段階から若い世代を巻き込み、会場づくりや情報発信など、関わりしのある構成にすることで、「自分が地域の一員である」という感覚を育てていきます。

また、イベント後には感謝の気持ちを伝える仕組みや、活動の中身を“見える化”することで、地域の温かさや楽しさ、やりがいを実感できるように工夫します。写真や SNS、掲示などを通じて、誰がどのように関わったのかが見えることで、活動の魅力が広がり、次の関心層の参加にもつながります。

さらに、こうした取り組みを通じて、将来的な推進役となる人材の発掘と、関係性の構築にもつなげていきます。いきなり大きな役割を担うのではなく、まずはできる範囲で関われるような柔軟な参加スタイルを提示し、「やってみよう」「また参加したい」と思えるような体験を重ねていきます。

若い世代の参加は、地域の将来を担う力であり、次の担い手育成への第一歩です。イベントを単なる催しではなく、関わりと育成の場として位置づけ、地域全体で応援し合えるしくみを整えていきます。

※桃山孤立ゼロプロジェクトについて

次年度は、希望する自治会に限って調査を随時実施する方式に変更しました。地域の自主性を尊重しながら、必要な支援が届くように関係機関と連携し活動を進めていきます。

また、調査を実施した船江中央・船江平和台エリアの住民に向けて実施報告とそこからの活動の取り組みについて検討する機会を作っていく予定です。住民の「困った」「やりたい」に寄り添う仕組みづくりを目指していきます。

【令和6年度 東山の下地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画評価表<2021~2026>

グループワーク意見の集約			
推進目標1:コミ協と自治会・町内会単位で仕組みを作ろう	評価 A・B・C	推進目標2:子どもから大人まで顔の見える関係づくりをしよう	評価 A・B・C
<p>・ゴミステーションの見守りや移動スーパーの活用が進められているが、地域活動の担い手不足が課題となっている。</p> <p>・住民の交流拠点としての茶の間の運営も継続的な支援が求められている。</p> <p>・若年層の地域活動への参加を促進するための仕組み作りが必要。</p> <p>・デマンドタクシーの活用、空き家管理、防犯対策の強化など、住民の安心・安全を確保するための取り組みが求められている。</p>	A	<p>・防災士の増員や女性の視点の重要性が指摘され、各町内で独自の防災対策が進められている。</p> <p>・見守り活動や地域交流の場づくりも積極的に行われ、子どもや高齢者を支える取り組みが多様化している。</p> <p>・ボランティアの高齢化や後継者不足が課題となる一方、イベントを通じた世代間交流の機会が求められている。</p> <p>・地域住民同士のつながりを強める活動が継続的に実施され、防災・福祉・教育の分野で連携を深めることが重要視されている。</p>	A
取り組み状況から見える課題			
<p>1. 防災・見守り活動の担い手不足と高齢化 地域の防災士や見守りボランティアの高齢化が進み、後継者の確保が課題となっている。特に、防災士の増員や女性の参加促進の必要性が指摘されているが、担い手をどのように確保するかが重要な課題である。</p> <p>2. 地域イベントの継続と世代間交流の減少 コロナ禍で中止となった運動会や祭りが再開されつつあるが、参加者や運営側の顔ぶれが固定化しており、後継者不足が問題視されている。世代間交流の場としてのイベントの意義は大きいですが、新たな参加者を増やす仕組みが求められる。</p> <p>3. 防災意識の地域差と対応のバラつき 各町内で異なる防災対策を実施しているが、取り組みに差があり、統一した情報発信や支援体制の構築が必要である。特に単独で防災訓練を行っている地域は、災害時の行動が迅速だが、地域ごとのノウハウ共有が十分でない可能性がある。</p> <p>4. 地域の支え合い活動の広がりや継続性の確保 高齢者見守りや友愛訪問などの福祉活動が活発に行われているが、活動を担う人材の確保が課題となっている。特に、地域活動の担い手の支援体制の強化が求められており、地域ぐるみでの協力体制の確立が必要とされている。</p>			
評価(取組んだことの効果や成果)			
<p>1. 防災・見守り活動の充実 防災士の増加や避難訓練の実施により、地域住民の防災意識が向上。見守り活動を通じて子どもや高齢者との関係が深まり、地域の安全性が高まった。</p>			

2. 地域交流の活性化

夏祭りやフェスティバル、ラジオ体操などの行事を通じて、住民同士の交流が促進。世代を超えたつながりが生まれ、孤立防止につながる効果が見られた。

3. 福祉活動の定着と支援の強化

友愛訪問や高齢者支援活動の継続により、地域内の支え合いが強化。社協や民生委員と連携し、ボランティアの参加を促すことで支援体制の安定化が図られた。

4. 地域の自主的な取り組みの広がり

町内ごとの特色を活かした防災対策や見守り活動が進み、住民の主体的な参加が増加。合同訓練や情報共有を通じて、地域全体での防災・福祉意識の向上が見られた。

次年度に向けて

1. 防災体制の強化

- ・ 各町内に防災士を1人配置し、地域ごとの防災意識と対応力を向上させる。
- ・ 避難所拠点を5つに増やし、災害時の受け入れ体制を充実させる。

2. 地域連携の強化

- ・ 自治会、支会、民生委員など地域で活躍する団体が情報共有会議に参画し、連携を深める。
- ・ 情報共有のエリア分けを「連携しやすさ」を基準に見直し、円滑な協力体制を構築する。
- ・ 地域内の施設が、イベントを協働で実施する。

【令和6年度 下山地区】 東区地域ふれあいプラン地区別計画評価表<2021~2026>

グループワーク意見の集約			
推進目標1:自治会・町内会と民生委員・児童委員との連携を深めよう	評価 A・B・C	推進目標2:顔の見える関係づくりを目指そう	評価 A・B・C
	B		A
<ul style="list-style-type: none"> ・自治会や民生委員が協力して活動を進める重要性が指摘され、情報共有や連携強化の必要性が強調された。特に、自治会役員や民生委員が互いに顔を知り、協力し合うことが重要である。 ・守秘義務や個人情報の取り扱いに関する認識の共有が不足しており、それが情報交換の障害になっている。自治会と民生委員の間で密な連携を取るための仕組みづくりが求められた。 ・地域福祉活動の多様な取り組み(例:子育てサロンや高齢者支援活動)が紹介され、今後の課題としてボランティアの確保や支援体制の強化が挙げられた。 		<ul style="list-style-type: none"> ・地域での挨拶運動や見守り活動は継続的に行われており、特に子どもとの顔の見える関係作りが効果的。民生委員や自治会、青パトなどが協力して見守り活動をしており、子どもたちにも良い影響を与えている。 ・令和7年度からふれあい給食を会場参加型で再開する。(令和6年度までは訪問形式で実施していた) ・住民同士の交流を促進するため、地域のイベントやボランティア活動が重要であり、顔見知りの関係を作ることが防犯にもつながると意見が集まった。また、後継者不足が課題となっている。 	
推進目標3:地域の茶の間の開催、活用の見直しをしよう	評価 A・B・C	推進目標4:	評価 A・B・C
	B		
<ul style="list-style-type: none"> ・地域の茶の間の活動は、新規参加者を増やすためには、プログラム内容や開催の工夫が重要。男性でも参加しやすい内容(例:スマホ教室やコーヒー講座)を考える必要がある。 ・参加者の高齢化が進んでおり、声掛けや活動の多様化が必要。お茶の間の活動だけでは集まりにくい場合、健康体操や出前講座、歴史や映画会など他のプログラムを組み合わせることが効果的。 ・季節や時間帯を工夫し、子どもや若い世代も参加できるようにすることが大切。特に土日やイベント型の活動が有効とされている。地域ごとに特色を出し、プログラムを分けて提供する方法も有効。 ・送迎や会場の確保、リーダーの育成が重要。自治会の活動が減少し、従来の集まりが難しくなったことに対して、新たなアプローチが求められている。 			

取り組み状況から見える課題

「地域の茶の間」などの集まりでは、新しい参加者を得るための仕掛けや呼びかけが必要である。高齢化に伴うリーダー不足や運営の担い手不足も問題であり、地域全体の関心を引き、活動を活性化させる仕組みが求められています。さらに、子どもや若年層を巻き込む工夫が不足しており、世代を超えた交流が難しくなっています。

評価(取組んだことの効果や成果)

地域の茶の間や見守り活動などを通じて、顔の見える関係づくりが進み、地域住民同士のつながりが深まりました。特に、見守り活動では子どもたちや高齢者との交流が増え、地域の防犯意識も高まりました。また、地域イベントや健康体操などを取り入れた活動は参加者の関心を引き、活発な交流を促進しています。

次年度に向けて

- ・ふれあい給食の再開を通して、交流・安否確認など地域のつながりを深めていくためにボランティアの調整を含めて全体をどのように(回数や形式)開くか検討していき子どもから高齢者、三世代の交流の場として開催できるようにしたい。
- ・自治会・民生委員児童委員協議会の情報共有は住みよいまちづくりには欠かせないため、今後も継続して開催していく。
- ・「下山コミ協支え合いの会」の支援は必要な人が声を上げやすいよう、自治会・町内会との情報共有や広報を強化していく。
- ・登校時のあいさつ声掛け見守り活動、青色パトロール活動も小学生に浸透しており、今後も子どもと大人の顔の見える関係づくりに向けた取り組みを継続していく。
- ・お茶の間について、参加者が増えるようにコミ協で情報共有を図る。
- ・コミ協が開催しているフレイル予防や介護予防の取り組みは好評であり、継続開催していく。

【令和6年度 紫竹中央地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画評価表<2021~2026>

グループワーク意見の集約			
推進目標1:地域ぐるみで子どもの安全を見守っていこう	評価 A・B・C	推進目標2:災害時の助け合いの基盤をつくろう	評価 A・B・C
	A		B
<ul style="list-style-type: none"> ・セーフティースタッフによる見守り活動を継続中。学区がバラバラな地区だが、適宜学校との情報交換も行っている。見守り活動は活発で地域での協力体制が強化されつつあるが、人数減少や下校時の見守り不足に課題が残る。 ・コミ協では「もちつき大会」や「防災訓練」を通じて住民同士の繋がりを深め、見守り活動を進めているが、自治会ごとの活動差がある。 		<ul style="list-style-type: none"> ・自治会ごとに世帯票や個人情報を活用し、災害時の支援体制を整備。防災会議や避難所マニュアルも配付。 ・高齢者や要支援者への訪問活動が進んでおり、地域での支え合いが強化されている。ただし、支援拒否への対応や個人情報の取り扱いに課題がある。 ・避難訓練を江南小学校で実施し、沼垂小学校区の世帯も参加。運営マニュアルやハザードマップの再確認が重要。 	
推進目標3:顔の見える関係づくりを進めていこう	評価 A・B・C	推進目標 4:	評価 A・B・C
	B		
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちからも挨拶されるが、大人からの挨拶で不審者扱いされることもある。大人同士のつながりが薄い。そのため、町内でのつながりができると良い。 ・地域の茶の間は新規メンバーが入りづらいが、認知症予防などの効果があり、自由な形で運営されている。 ・子育て支援座談会や交流イベントを通じて、親同士の顔合わせや勉強が促進され、地域のつながりが深まっている。 			
取り組み状況から見える課題			
<ul style="list-style-type: none"> ・地域の茶の間は自由な運営が行われているが、参加メンバーが固定化しており、新規参加者が入りづらい。地域全体での交流を広げるための工夫が必要。茶の間に限らず、日頃から接点のない方とどうやってつながるかに課題を感じる。 ・子育て世代のつながりが希薄化。茶の間の経験を活かして、多世代の方が利用できる場をつくれると良い。 			
評価(取組んだことの効果や成果)			
<ul style="list-style-type: none"> ・子育て世代交流会は参加者から好評であり、今後も継続してほしいとの声があった。お土産がもらえると参加者から喜ばれる。内容の検討が必要なため R7 年度の実施は未定。 ・地域の茶の間運営や子どもとの交流イベントが実施され、認知症予防や世代間交流が活性化し、地域のつながりが少しずつ深まっている。これにより、住民間の協力体制も向上した。 ・挨拶活動や日頃の活動での住民同士のつながりを活かし、子どもの見守り意識が高まっている。挨拶により地域内の信頼関係が強化され、特に子どもたちが積極的に挨拶を行っている。 			

次年度に向けて

- ・ 地域の茶の間の敷地内空き地で花壇整備や野菜づくりを行う。世話役を当番制にして全員が役割を持ちながら楽しんで活動できるよう工夫し、また、役割をつくることで新たな住民の参加を狙う。
- ・ 回覧等による地域活動の広報のほか、イベント開催後に活動内容の振り返り・評価を行うことで、次の活動に活かしていく。
- ・ 地域住民を講師に招くなど、「得意なこと」を活かしたイベントを開催し、住民が活躍できる場をつくっていく。

【令和6年度 木戸地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画評価表<2021~2026>

グループワーク意見の集約			
推進目標1: 健康寿命の延伸~体が資本、体力を落とさない!	評価 A・B・C	推進目標2: 地域を支える担い手を育てよう~楽しくなければ集まらない!	評価 A・B・C
	A		B
<ul style="list-style-type: none"> ・ だんだんダンスは紫竹会場での継続実施を決定。参加者は10名程度であり、冬季の参加者減少が課題。 ・ 健康ボウリングは毎回15~20名が参加。回覧による参加は少ないが口コミで増加。参加者獲得のため、活動の様子を周知する等工夫できると良い。 ・ 健康吹き矢は支部の立ち上げ準備中。他地区からの期待の声もあり、学校との連携を進めたい。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 若い世代の参加促進が課題。防災訓練後にBBQ等イベントを開催し、地域活動を知ってもらえると良い。 ・ 木戸中防災訓練は中学生にも準備段階から参加してもらうことで、共助の意識が芽生えるいい機会となっている。 ・ それぞれの地域活動が見えづらい。活動内容を回覧で周知し、情報が広がるようにすることが必要。 ・ 支え合いの活動スタッフは5人で負担が大きいので、増員と役割分担を検討していきたい。 	
推進目標3: 地域のつながりづくりを進める!	評価 A・B・C	推進目標4:	評価 A・B・C
	B		
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自治会・町内会長と民生委員の情報交換会を年1回開催し地域の情報共有を強化したい。若手も参加しやすいよう夜間開催も検討。 ・ 東新中学校やよつば学園との地域内でのふれあいが増え、学校と地域との顔の見える機会が生まれている。 ・ あいさつ活動が重要視され、通学路での見守りや声掛けが行われているが、あいさつをしない子もいる。まずは大人からの積極的なあいさつが大切。 			
取り組み状況から見える課題			
<ul style="list-style-type: none"> ・ だんだんダンスや健康ボウリングでの参加者が減少し、地域ごとの参加者数に差が生じている。特に、回覧板だけでは新規参加者を呼び込むのが難しい。 ・ 地域活動の情報が住民に十分伝わっていないため、活動への関心が低い。活動内容の見える化が必要。 ・ 子育て世代や若年層の地域活動への参加が少ない。防災訓練後の交流イベントなど、参加しやすいきっかけを作る必要がある。 ・ 地元神社と密接な関係を築き、神社を中心とした活動ができると良い。夏祭りへの子どもの積極的な参加のためには、時間調整等、学校の理解を得ながら協力していく体制が必要。 			

評価(取組んだことの効果や成果)

- ・ 健康ボウリングは口コミでの参加が増え、大会開催をすることで参加者のモチベーション維持・生きがいとなっている。他地区からの参加者もあり、参加者同士の繋がりが深まっている。
- ・ 町内での畑作業や防災訓練など、地域住民が主体的に参加し、高齢者の健康寿命延伸や防災意識向上に貢献している。
- ・ 例えば、豆まきイベントでは親子連れが多数参加し、地域活動への関心を引き出す成果が得られており、子どもと保護者の参加促進の効果があつた。

次年度に向けて

- ・ 健康寿命の延伸に向けて、在宅介護をテーマとした勉強会を開催する。全自治会長を対象とし、まず会長に介護に関する知識を身に付けてもらうことで、住民からの相談を適切に関係機関につなげられるようにする。
- ・ 自治会長と民生委員のコミュニケーションの機会が少ない。情報交換会に限らず、自治会の総会等で顔合わせができるとうい。

※ 木戸地区の中でも地域性に差があるため、エリアごとに課題は異なっている

【令和6年度 牡丹山地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画評価表<2021~2026>

グループワーク意見の集約			
推進目標1: 安心して暮らせるまちづくりをしよう	評価 A・B・C	推進目標2: 地域の茶の間・居場所を活用しよう	評価 A・B・C
	A		A
<ul style="list-style-type: none"> ・「思いやり応援隊」は地域での活動を継続(草取りや電球交換など)。依頼が多いが担い手の高齢化が課題。 ・亀田郷芦沼会との連携で認知症捜索模擬訓練により、地域のつながりや助け合い精神の強化を深めている。 ・学校単位での見守り活動や防災訓練を実施することにより、地域の安心感を高めている。 		<ul style="list-style-type: none"> ・子どもから高齢者まで利用できる地域の茶の間や子ども食堂が増えており、交流の場として機能している。 ・茶の間では健康講座等をする参加者が増加するが、若い世代の参加が少なく、呼びかけの工夫が必要。 ・地域の活動をもっと多くの人に知ってもらうため、周知方法の工夫や広報の強化ができると良い。 	
推進目標3: 地域で情報を共有しよう	評価 A・B・C	推進目標4:	評価 A・B・C
	B		
<ul style="list-style-type: none"> ・自治会と民生委員の連携が重要。双方での情報共有の難しさ(個人情報への壁)が課題。 ・災害時の対応では、自助・共助を意識した活動が求められ、自治会ごとに声掛け等に取り組んでいる。 ・各団体の活動に活かしていくための交流会が開催できると良い(例:自治会長と民生委員の情報交換会等) 			
取り組み状況から見える課題			
<p>地区内での個人情報の取り扱いや情報共有は大切だと思うが、どうやって進めていくかが課題。要支援者名簿の扱いは自治会ごとに異なっていたり、アパート住民等の情報不足を感じる。民生委員は複数自治会を担当するため、自治会との連携が難しいと感じている。</p>			
評価(取組んだことの効果や成果)			
<ul style="list-style-type: none"> ・「思いやり応援隊」による活動で地域住民の顔が見えるようになり、安心感が向上した。 ・防災訓練や自主防災活動の実施により、地域の防災意識が高まり、協力体制が強化されている。 ・コロナ禍を経て住民同士の交流が活発になり、イベントを通じて地域活動への参加意識が高まった。 			
次年度に向けて			
<ul style="list-style-type: none"> ・自治会ごとの活動の活発化。顔が見える機会をつくっていくことで、自治会の役割や取り組みを住民に周知し、自然な交流の中で次世代の人材発掘ができると良い。 ・「思いやり応援隊」の担い手募集に向け、パンフレットの配付方法を工夫していく(大学への設置等)。 ・自治会と民生委員の情報交換会の開催を検討。民生委員の改選時期に実施できると、お互いの役割や活動内容を知ることができる。 			

【令和6年度 大形地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画評価表<2021~2026>

グループワーク意見の集約			
推進目標1:地域のつながり、顔の見える関係づくりを推進する	評価 A・B・C	推進目標2:安心安全なまちづくりを進める	評価 A・B・C
	A		A
<ul style="list-style-type: none"> 各自治会で地域の茶の間や見守り活動を継続。参加者の固定化や新規参加者の呼び込み、後継者探しが課題。 子ども食堂は会食形式で開催。高齢者との交流が自然に生まれる。 青少年育成協議会が若い世代の仲間づくりに力を入れており、徐々に担い手のバトンタッチができてきている。 		<ul style="list-style-type: none"> 交通安全や通学路の安全確保に取り組み、不審者対策や防犯カメラ設置をしている。 避難訓練や地域の防災対策を強化し、若い世代への参加呼びかけが必要。 地域内で協力して見守りや安全対策を実施し、あいさつを通じた顔の見える関係づくりを推進している。 	
推進目標3:支えあいのしくみづくりを推進する	評価 A・B・C	推進目標 4:	評価 A・B・C
	B		
<ul style="list-style-type: none"> 自治会役員の交代に伴い、「支え合い」の理解促進が重要。 地域の茶の間参加者が固定化しているため、誰でも参加できるような改善が必要。 気軽な交流の場があるといい。ごみステーションにベンチ設置で憩いの場を作ることで防犯対策にもなる。 			
取り組み状況から見える課題			
<ul style="list-style-type: none"> ボランティアの高齢化が進んでおり、活動の継続に向けた新たな担い手募集のための工夫が必要。コミュニケーションを大切にし、自分たちが活動を楽しみながら担い手発掘をしていく。 既存の地域活動に留まらず、様々な世代、属性の住民の関心を引くような機会づくりができるとう良い(詐欺防止講座やPC教室等) 			
評価(取組んだことの効果や成果)			
<ul style="list-style-type: none"> 地域の見守り活動や避難訓練が地域住民の安全意識を高め、日常的な安全対策や災害時のスムーズな避難行動に繋がった。 行事の周知にSNSやQRコードを活用することで、若い世代も参加しやすくなり、多くの人の交流機会をつくることできた。 子ども食堂を通じた高齢者と子どもの自然な世代間交流が進み、顔の見える関係性づくりが生まれた。 			
次年度に向けて			
<ul style="list-style-type: none"> 住民に対して、支え合い活動のさらなる理解促進や活発化を図る(支え合い活動のPRや勉強会等の開催) 既存の地域活動を継続していくため、新たな担い手発掘・育成のための工夫を考えていく。 			

【令和6年度 江南地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画評価表<2021~2026>

グループワーク意見の集約			
推進目標1:後継者と若い人を育成しよう	評価 A・B・C	推進目標2:地域住民の関係づくりを強めよう	評価 A・B・C
	B		B
<p>○ボランティアの継承と担い手の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仕事内容を理解してもらうことと、役割分担を進めることで負担感を無くしていく。 ・楽しさややりがいを伝え、参加者が継続できる環境をつくる。 <p>○役員選任と世代交代の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年齢順での交代や一年交替制など、無理のない形で世代交代を進める。 ・副会長を複数人置くなど、多くの人が関われる仕組みを模索する。 <p>○ボランティア募集の強化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イベント時に親子向けの募集を行い、若い世代の関心を高める。 <p>○地域活動の継続と次世代へのつなぎ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども食堂などの取り組みを通じ、良い経験が次世代に引き継がれるよう支援する。 		<p>○地域イベントへの参加促進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・町内ごとの活動や親子参加型イベントを企画し、住民同士の交流を深める。 <p>○学校との連携強化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域行事の情報を学校と共有し、子どもや保護者への周知を強化していく。 ・中学生の地域活動参加を促進する。 <p>○多様な世帯へのアプローチ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新興住宅地の住民にも関わる機会を提供し、地域のつながりを強化していく。 <p>○地域活動を通じた子どもの育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・祭りや清掃活動を通じて、地域の文化や生活の知恵を伝える。 <p>○見守り活動の継続と担い手確保</p> <ul style="list-style-type: none"> ・民生委員の負担軽減を図り、地域全体で子どもを見守る体制を構築する。 <p>○地域づくりのヒントを活かす</p> <ul style="list-style-type: none"> ・読み聞かせボランティアなどの活動から、新たな地域づくりの手がかりを探る。 	
推進目標3:支援のためのネットワークづくりをしよう			評価 A・B・C
			B
<p>○地域全体の一体感を醸成 —・学校やコミ協と連携し、地域住民が一体感を持てるイベントを企画する。</p> <p>○困っている人への支援強化 —・NPO 等と協力し、支援が必要な人を見つけやすくする仕組みを構築していく。</p> <p>○中学生の地域活動参加促進—・中学校を通じて自治会長アンケートや地域情報を子どもに直接伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・草取りなどの地域活動に中学生を巻き込み、参加機会を増やす。 ・学校からの募集を通じて、活動への参加者を増やす。 <p>○災害時のネットワーク強化—・避難所運営委員会を活用し平時から地域住民が顔を合わせる機会を増やす。</p>			

取り組み状況から見える課題

地域には「何か役に立ちたい」、「地域に関わってみたい」と思っている住民が多く、その思いを形にできる仕組みづくりが求められている。担い手の高齢化や若年層の参加機会の少なさは課題であるが、これらは工夫の余地が大きく、今後に向けた前向きな取り組みへの機会ともいえる。学校や家庭との連携も進みつつあり、地域全体で“つながる仕組み”と“地域活動に参加する楽しさ”を育てていくことが、今後の大きな可能性となっている。

<主な内容>

- ・新興住宅地では自発的な参加が必要な世帯が多い
- ・後継者不足と活動が固定化しているところがある
- ・困っている人の情報が表に出にくい構造がある

評価(取組んだことの効果や成果)

中学生の地域活動やあいさつ運動、子ども食堂の取組が世代を超えた交流につながり、学校と地域のつながりも広がった。イベントを通して、子ども・大人双方に楽しい体験が提供され、参加へのハードルが下がった事例も見られた。副会長複数制など、柔軟な運営体制も一部地域で機能しており、新しい関わり方が少しずつ芽生えている。

<主な内容>

- ・AKG や清掃活動で中学生と地域住民の交流が進展した
- ・子ども食堂での継続的なボランティア参加が見られた
- ・年齢順交替制など後継者対策の工夫が導入され始めた

次年度に向けて

次年度は、地域の「見える関係性」を育むために、参加を促す仕掛けや情報発信の工夫が重要となる。イベントを通じた体験共有や、学校との情報連携強化を進めることで、若年層・子育て世代も自然に関われる機会を広げたい。「できる人ができることを」無理なく続けられる環境づくりを大切にしながら、みんなでつながる地域づくりを進めていく。

<主な内容>

- ・学校・地域・家庭の連携をさらに深める仕組みづくり
- ・体験・動画などで活動の「見える化」を進める
- ・誰もが気軽に関われる「一歩目」のとなるような仕組みをつくる

【令和6年度 中野山地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画評価表<2021~2026>

グループワーク意見の集約			
推進目標1: 顔の見える関係づくりを推進する	評価 A・B・C	推進目標2: 非常時にも対応できる仕組みづくりを推進する	評価 A・B・C
<p>(要約)</p> <p>中野山地区では、住民同士の交流を深めるための活動が積極的に行われています。老人クラブでは輪投げ大会が盛況に実施され、地域の交流が進んでいます。民生委員は友愛訪問を行い、高齢者の生活支援や安否確認を行っているものの、ゴミ出しや除雪などの支援が必要な場合の対応方法に課題があります。コミ協では清掃活動や交通安全活動が行われ、地域の子どもたちも参加しています。特に、地域の見守り活動が重要視され、高齢者や子どもたちの安全を守る体制づくりが進められています。</p> <p>また、地域の課題として、高齢者や子どもたちへの支援体制の充実が求められています。見守りボランティアの人手不足や、地域行事への参加促進が課題として挙げられています。今後は、新たに地域に引っ越してきた家庭とのつながりをどう構築するか、また、高齢者の安否確認を地域全体でどのように支援するかが重要なテーマとなっています。</p>	A	<p>中野山地区では、高齢者支援のために支え合いの仕組みづくりが進められています。75歳以上の独居高齢者の実態調査が行われ、6~7割の対象者が自治会等への情報共有に同意しましたが、個人情報の取り扱いに対する懸念もあります。今後、名簿活用方法の改善が求められています。避難時には車の渋滞や避難所運営の課題があり、訓練を通じて実践的な対応が必要とされています。</p> <p>また、中学生の地域貢献活動をマッチングする仕組みの構築が課題となっており、地域教育コーディネーターを通じた協力の試みが行われています。民生委員や自治会長は、災害時に高齢者への声掛けや支援ができる体制づくりに努めていますが、個人情報を提供しない人々との連携や支援方法には限界があり、改善が必要です。今後、地域の防災や支援体制を強化し、顔の見える関係づくりが重要であるとされています。</p>	C
推進目標3: 気軽に誰もが集える居場所づくりを推進する	評価 A・B・C	推進目標4: 美しい環境づくりを推進する	評価 A・B・C
<p>中野山地区では、地域の茶の間活動が活発に行われていますが、参加者が固定化しており、リーダー育成や新規参加者の獲得が課題です。地域の茶の間やラジオ体操後の清掃活動が行われていますが、距離や時間帯が参加障壁となる場合もあり、移動支援や誘い合わせが必要です。また、フリースペースなかのやまは子ども向けには充実していますが、大人への周知が不足しています。</p> <p>さらに、フレイル予防事業は参加者が少なく、継続的な参加の重要性を伝えるために専門職の協力が求められています。空き家の活用が進まず、地域での集える場所</p>	B	<p>中野山地区では、コミ協のプランター設置活動や環境美化活動が行われ、地域に潤いを与え、住民から好評を得ています。特に学校との連携により、子どもと大人と一緒に活動する機会が増え、自治会役員と子どもたちのつながりも深まっています。しかし、参加者の高齢化が進み、今後の活動における担い手不足が課題となっています。</p> <p>また、一斉清掃や地域の緑化活動が盛況に行われており、清掃活動には中学生も参加していますが、若者の参加が少なく、今後の巻き込み方に工夫が求められています。地域活動には高齢者が多く参加していますが、若</p>	A

の確保が難しい状況です。特に中野山小学校周辺には集会場所がなく、高齢者や子ども向けの居場所づくりが求められています。地域全体で支え合い、みんなが利用できる居場所づくりが重要です。

い世代の関心を高める必要があります。さらに、地域活動に対する積極的な参加を促進するため、楽しさを感じてもらうことが重要とされています。

取り組み状況から見える課題

1. 参加者が固定化している

地域の茶の間の活動について「いつもの人しか来ない」「新しい人が入りづらい雰囲気がある」との声がありました。特に若い世代の参加が少なく、次の担い手育成が課題です。

2. 高齢者支援を知る仕組みや機会の必要性

「ゴミ出しを頼める人がいない」「雪かきの時に助けてくれる人が見つからない」など、日常のちょっとした困りごとを助け合える体制が不十分だという意見がありました。

3. 個人情報の壁が支援の妨げに

災害時の避難支援について、「名簿があっても活用しづらい」「本人が情報を出したくない」という課題があり、緊急時の声かけや支援に不安が残ります。

4. 新しく越してきた人とのつながりが弱い

「引っ越してきた家族が地域と関わるきっかけがない」「行事の案内が届いているか分からない」という声もあり、つながりをつくっていくしくみが必要とされています。

評価(取組んだことの効果や成果)

1. 住民同士の交流が深まった

輪投げ大会や茶の間に「久しぶりに顔を合わせられてよかった」「話す機会ができた」という声が多くあり、特に高齢者の孤立防止に効果がありました。

2. 子どもたちが地域活動に参加した

清掃活動に中学生が加わったり、小学校と連携して花のプランター作りを行うなど、「子どもと大人と一緒に活動できた」という喜びの声がありました。

3. 安心できる居場所づくりが続いている

フリースペースなかのやまや地域の茶の間の活動など、身近に集まれる場があり「顔を見られて安心」「気軽に話せる場所があるっていい」という評価がありました。

4. 地域美化活動への参加意欲が高い

一斉清掃やプランターの花植えでは、「まちがきれいになると気持ちがいい」「やってよかった」との声があり、活動後の満足感や達成感が共有されました。

次年度に向けて

「向こう三軒両隣」のような、顔の見える安心な関係づくりを基本に、地域ぐるみの支え合いを広げていきます。

1. 子どもも若い人も参加しやすい地域活動へ

- 子どもや若い世代も気軽に関われるような活動(例:地域祭り)を実施し、「ここに来ると楽しい」と感じてもらえるような工夫をします。

2. 地域イベントの開催でつながりを広げる

- 小さくても温かいつながりを感じられるようなイベントを定期開催し、新たな参加者を迎え入れる仕組みをつくります。
- 地域に引っ越してきた方や普段顔を出せない方にも届くような「知る機会」も検討します。

3. 防災を「みんなで考える」テーマに

- 防災は世代を問わず関心を持ちやすいため、活動の切り口として活用します。
- 要支援者支援や避難行動についても、名簿だけでなく“普段からのつながり”をベースにした対応を共有していくことを目指します。

5. 制度や活動を「知る」機会をつくる

- 支え合い制度、地域の取り組み、高齢者支援などを分かりやすく紹介するガイドブックを令和6年度は作成しました。効果的な活用ができるように周知を図っていきます。
- 「知っている人が助かる」ではなく、「みんなが知っている地域」にすることを目指します。

【令和6年度 南中野山地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画評価表<2021~2026>

グループワーク意見の集約			
推進目標1:「ヘルプ南中野山」の活動を拡充する	評価 A・B・C	推進目標2:みんなが集まり楽しめる居場所づくりをする	評価 A・B・C
	A		B
<p>1 移動支援の開始と拡充: 令和6年7月からボランティアの乗用車による移動支援(ボランティア車両)が開始され、利用者は増加傾向。特に通院利用が多く、週3回・月10回以上利用する方もいる。</p> <p>2 支援の多様化: 従来の支援内容に加えて家事支援(屋内掃除・調理等)や除雪支援なども依頼があり、公的サービスでは補えない部分も担っている。</p> <p>3 利用者の固定化: 依頼件数は多いが実利用人数はそれほど増えていない。</p> <p>4 地域の自発的な助け合い: ヘルプ南中野山を通じた助け合いを基本に、将来的には地域住民同士での助け合いが自然にできることを目指している。</p>		<p>1 地域の茶の間の実施: 各自治会館や飲食店など5カ所で月1回開催され、固定メンバー中心ながら一定の参加者がいる。</p> <p>2 多様なプログラム: 介護サービス、手芸、ピアノやギター伴奏による歌、昔語り、スマホ教室、ビンゴゲーム、健康マージャン市政さわやかトーク便など、地域ごとに工夫した内容を実施している。</p> <p>3 資金やスタッフの課題: 自治会からの補助があるが、運営資金や世話役の確保に苦労している。</p>	
推進目標3:民生委員児童委員と自治会の情報共有と連携強化	評価 A・B・C	推進目標4:防災体制を充実させる	評価 A・B・C
	A		B
<p>1 情報交換会は毎年7月に実施(自治会長連絡会議と併催)。南中野山地区は「1自治会1民生委員」の基本体制が整い、連携が良好である。</p> <p>2 自治会との関係</p> <p>(1)一部自治会では、民生委員が自治会役員になっている。</p> <p>(2)自治会と連携しながら高齢者見守りを実施している。</p>		<p>1 防災訓練</p> <p>(1)防災訓練を年2回(独自+コミ協主催)実施し、継続的な訓練を重視している自治会もある。</p> <p>(2)ほとんどの自治会が情報伝達を兼ねた訓練を実施している。</p> <p>2 避難所運営</p> <p>(1)南中野山地区13自治会の避難所を南中野山小学校に統一した。</p> <p>(2)コミ協主導で役割分担し、組織的に対応。</p>	
取り組み状況から見える課題			
<p>1 ヘルプ南中野山について</p> <p>移動支援の持続可能な運営 : 利用者増加に伴うボランティアの増員と育成を図る。 地域の自発的な助け合いの意識醸成をどのように広げていくか。</p> <p>2 居場所づくりについて</p> <p>参加者の固定化: 新たな人も参加しやすい仕組みや広報の工夫が必要である。 居場所の確保: 自治会ごとに一カ所の居場所を目指しているが、空き家活用の難しさや、企業からの施設借り上げの制約(利用日時・スペース)がある。</p>			

居場所の多様化:子ども食堂や認知症カフェの立ち上げを検討している。

3 民生委員児童委員と自治会の連携について

守秘義務の関係で自治会との情報共有に制限があるため、連携の仕方を慎重に検討する必要がある。一方で、民生委員が自治会の役員になることで、地域の状況を理解しやすくなり、協力しやすい面もある。

4 防災体制について

防災訓練:若年層の関心が薄く、継続の工夫が必要である。

避難行動要支援者の対応:自治会長が個別計画を立てる必要があるが、実施が難しい。支援者の固定化を避け、柔軟な対応を推進していく。

評価(取組んだことの効果や成果)

ヘルプ南中野山は、日常的な生活支援を中心に、最近は移動支援の依頼が増えていることから、地域の助け合いが着実に広がっていると見える。除雪や草取り支援も好評で、自治会や隣近所による自主的な取り組みも進んでいる。

居場所づくりとしては、民間企業の店舗スペースなど会場を地域の茶の間として活用することにより、交流の場として発展している。この茶の間は三つの自治会が連携して運営することにより、参加者の幅が広がった。飲食店での茶の間も外出機会の創出に貢献している。また、コミ協主催の健幸教室は口コミで人気が高まり、新規参加者も増加している。

民生委員と自治会の連携は、1自治会1民生委員の基本体制により協力が進み、地域の支え合いが強化されている。自治会会議や地域の茶の間への参加を通じて、顔の見える関係が築かれ、連携がスムーズになった。民生委員の負担軽減も考慮しながら、見守り活動や情報共有が円滑に進んでいる。

防災体制については、防災訓練や避難所運営の取り組みが積極的に進められ、地域全体の防災力が向上している。各自治会での訓練が定着し、班ごとの安否確認体制も強化されている。避難行動要支援者名簿の活用や支援の柔軟な対応が進み、共助の意識が高まっている。防災訓練への参加者も多く、住民同士のつながりが強まることで、安心できる地域づくりが実現している。

次年度に向けて

次年度は、持続可能な支援と地域のつながり強化を重点に取り組む。ヘルプ南中野山では、家事支援や移動支援のボランティアを育成する。居場所づくりでは、広報の充実などにより、多様な世代が参加しやすい環境を整える。また、子ども食堂や認知症カフェの立ち上げに向けて具体的な検討を進めていく。民生委員と自治会の連携は、守秘義務を尊重しつつ、地域課題を共有し、協力体制を今後も維持していく。防災体制では、若年層の参加促進や個別計画の実現に向けた支援体制を整え、地域全体の防災力向上を目指す。

【令和6年度 東中野山地区】 東区地域ふれあいプラン地区別計画評価表<2021~2026>

各グループワークの意見集約			
推進目標1: 誰もが安心して暮らしていただけるためのネットワークを充実させる	評価 A・B・C	推進目標2: 自治会と民生委員・児童委員との連携を強化する	評価 A・B・C
	B		A
<p>地域活動において、各自治会はさまざまな支援活動や地域交流の取り組みを行っています。特に「地域の茶の間」や「支え合い応援隊」の活動は、高齢者支援や住民間の助け合いを促進する重要な役割を果たしています。しかし、ボランティアの参加者が少ない、負担感が強い、ボランティアの高齢化などの課題も抱えています。例えば、支え合い応援隊はボランティアが集まりにくく、活動が続きにくい現状です。</p> <p>また、地域の活性化や世代間の交流も重要であり、子どもや若い世代の参加が促進されています。自治会では、イベントや活動を通じて新しい住民や若年層とのつながりを深める努力がされています。地域行事に対しては、世代交代や持続的な運営を目指す工夫が求められており、例えば役員の経験積みや部会による分担が行われています。</p> <p>課題としては、高齢者支援や空き家問題、人口減少が挙げられ、地域活動が今後も維持されるためには、さらに多世代が参加できる仕組みや支援が求められています。</p>		<p>自治会と民生委員の連携が強化されており、自治会役員会議に民生委員が参加する形で協力体制が築かれています。民生委員が役員を兼ねることで、情報交換が円滑になり、地域内の問題解決が進んでいます。しかし、担当エリアが複数にまたがると対応が手薄になりがちで、成り手不足が課題となっています。自治会内で民生委員の役割を認知してもらうために、総会や役員会に定期的に参加してもらい、ネームホルダーなどで識別しやすくする対策も検討されています。</p> <p>民生委員は見守り活動にも参加していますが、呼鈴を鳴らしても応答がない場合、入院や旅行などが理由であることが多いとされています。自治会や民生委員は、その情報を事前に共有し、適切に対応できるよう努めています。</p>	
推進目標3: 担い手の育成	評価 A・B・C	推進目標 4:	評価 A・B・C
	B		
<p>自治会活動では役員の担い手不足が深刻で、特に高齢化に伴い、次の世代を見つけることが重要とされています。輪番制を導入した自治会もあり、役員交代を促進する工夫が求められています。デジタル化の進展により、LINE やメールでの情報共有が行われ、会議の効率化も図られています。しかし、自治会への関心が薄れ、役員をやりたいくないという声も多く、参加を促すためには柔軟なアプローチが必要です。若手を巻き込み、行事を通じて楽しさを感じてもらうことも必要です。また、</p>			

自治会活動を行う際は、無理に全員参加を求めず、できる範囲で協力をお願いすることが重要です。自治会の運営には地域のつながりを強化する体制が求められています。

取り組み状況から見える課題

1. ボランティアの不足と高齢化

支え合い応援隊では、定期的な見守りや買い物支援を行っていますが、参加するボランティアのほとんどが高齢者で、活動の負担が偏っている状況です。

2. 世代間の交流不足と若年層の参加促進の難しさ

地域の茶の間活動や防災訓練には主に高齢者が参加しており、子育て世代や若い住民との接点が少ない地区もあります。特に、防災訓練では「若い人の参加が少なく、実際の災害時に世代間の連携が取りにくいのではないか」との懸念も出ています。若年層からは「活動内容に興味を持たない」「仕事や育児で参加しにくい」といった声もあり、関心を引く工夫が求められています。

3. 自治会と民生委員の連携における課題

民生委員が自治会役員会議に参加することで情報交換は進んでいるものの、複数の自治会を担当する民生委員にとって負担が大きくなっています。特に、民生委員が高齢化する中で、地域の見守り活動や個別の相談対応にかかる時間的・体力的な負担が問題となっています。また、地域住民の中には民生委員の役割を十分に理解していない人も多く、「誰に相談すれば良いかわからない」という声が寄せられています。

4. 役員の担い手不足と関心の低下

自治会の役員を引き受ける人が年々減少しており、特に若い世代の関心が低いことが課題です。例えば、役員選出を行う際に「仕事が忙しい」「役員をやりたくない」といった理由で辞退されるケースが多く見られます。また、自治会行事の企画や運営に関わる人も限られており、特定の人に負担が集中することで、継続的な活動が難しくなっています。

評価(取組んだことの効果や成果)

1. 支え合い活動の充実による高齢者支援の促進

地域の茶の間活動では、定期的な高齢者が集まってお茶を飲みながら交流できる場を提供しています。これにより、一人暮らしの高齢者が安心して過ごせる居場所を得られたと好評です。また、支え合い活動では、買い物支援や見守り活動を実施し、特に外出が困難な高齢者から感謝の声が寄せられました。

2. 新しい住民や若年層とのつながりづくりの努力

夏祭りやスポーツイベントなどを通じて、新しい住民や子育て世代を対象にした交流イベントを実施した地区もありました。特に、親子で参加できるイベント(例:子ども向け工作教室や餅つき大会)では、多くの若い世代の参加が見られ、新しいつながりが生まれました。参加者からは「子どもが地域に馴染みやすくなった」という声がありました。

3. 自治会と民生委員の協力体制の構築

自治会役員会議に民生委員が定期的に参加することで、地域内の問題を共有し、迅速に対応できるようになりました。例えば、見守り活動の際に「一人暮らしの高齢者と連絡が取れない」という課題が発生した際も、事前に民生委員が状況を把握しており、すぐに対応することができました。

4. デジタルツールを用いた情報共有の効率化

LINE やメールを利用した連絡網を導入することで、これまで紙ベースで行っていた会議案内や議事録の共有が迅速化されました。特に若い世代の役員にとっては、スマートフォンでの情報確認が容易になり、会議への参加

率が向上しました。

次年度に向けて

・これまでの担い手に加え、新たな人材の発掘と参加促進に力を入れていきます。特に、地域に暮らす若い世代にも目を向け、それぞれが「できる範囲」で関われる仕組みや機会をつくることで、無理のない形で地域活動への参加を促していきます。

・空き家の増加や独居高齢者の暮らしに関する課題が顕在化する中、地域として安心して暮らし続けられる環境づくりが求められています。特に、緊急時の連絡先となるご家族が県外など遠方におられる場合、迅速な対応が難しいケースもあり、支援の体制強化が急務です。こうした要支援者への見守りや対応を地域全体で支えるため、行政や各種相談機関との連携を深め、実効性のある仕組みづくりに取り組んでいきます。また、空き家の活用や対策についても、地域の課題として位置づけ、関係機関と協力しながら進めていきます。